

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20720127

研究課題名（和文） 名詞の機能語化にかかわる諸要因の通時的分析

研究課題名（英文） A Diachronic Analysis of Grammaticalization in Japanese Noun Phrase

研究代表者

北村雅則（KITAMURA MASANORI）

名古屋学院大学・商学部・講師

研究者番号：50455424

研究成果の概要（和文）：本研究では概して2つの成果を得た。1点目は名詞の文法化の発生時期と変遷の要因を探るということ、もう1点は分析するためのコーパス作成である。名詞の文法化については、モノダとツモリダを例に用法と変遷を調査した。インターネット上には古典作品を電子テキストにしたものが多く存在するが、効率よく検索することが難しいため、既存の電子テキストを集約し簡便な検索ができるよう中世・近世のコーパスを整備した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I obtained two major outcomes; 1) to understand the origins and the factors affecting their grammatical transformation of Japanese noun phrases; and 2) to construct a corpus for these analyses. For the first outcome, focusing on the two words, ‘-monoda’ and ‘-tsumorida’, I investigated their usage and semantic changes. Although there are a number of electronic text files of Japanese classic works on the Internet, it is not easy to search for necessary examples efficiently. Therefore, I constructed the corpus of Japanese classic works in the Middle Ages and early modern ages with a view to collecting the existing electronic text files and searching for the examples with ease

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法化・名詞・コーパス

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の出発点

研究開始当初の研究では、名詞の機能語化について古代語・現代語研究ともに、用法の

記述に文法的特徴の記述に主眼があった。古代語から現代語への構造変化、および、構造変化の要因に関する論究は増加しているが、各々の形式の語誌としての研究を蓄積している段階であった。

(2) 研究代表者の研究状況

研究代表者は、モノダ文を分析することにより、名詞の機能語化（助動詞化）の背景には、新屋映子（1989）（「“文末名詞”について」『国語学』159）が述べる「文末名詞文」が大きく関わっていることを示唆した（参照：北村雅則（2005）「本性・一般的傾向を表すモノダ文」『名古屋大学国語国文学』96）。文末名詞文とは、「太郎は朗らかな性格だ」のような「XハYZ（Yは名詞修飾、Zは主名詞）ダ」という構造であり、述語名詞Zについて「性質」「様子」など実質的な値を文中の他の要素に依存する名詞をとる文である。文末名詞文は「がの交替」を認めないなど構文的にも形式名詞述語文と似た振る舞いをするのが三宅（2005）（「現代日本語における文法化－内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1-3）でも指摘されている。

(3) 分析するための手がかり

「文末名詞文」は、①「XハYZダ」という構造、②「YZ」の名詞修飾関係（「ZハYダ」のような意味関係で、措定文的に主名詞の値を埋める役割を名詞修飾が担う）、③「Z」の意味特性（パラメーターを必須とする）、という三つの特徴を有する（cf. 北村（2005））。文末名詞文についても、現代語における現象記述段階であり、名詞修飾関係と述語名詞の意味特性という文末名詞文特有の性質が、言語変化の過程でどのように発生し、変化してきたのかについては、十分議論されてきたとは言い難かった。そこを分析し、モデル化を試みることは、名詞の機能語化（変化）のみならず、現代語研究においても大いに有益であるという目論みを持ち、研究を開始した。

2. 研究の目的

(1) 研究目的の概要

研究目的をまとめると、以下の3点に集約される。

- ・形式名詞の助動詞化の過程および変遷に関わる文法的な要因分析
- ・現代語の研究成果を援用した、名詞の機能語化に関わる通時的な分析手法の確立

- ・言語の実態記述に留まらない文法的な枠組みによる言語変化のモデル化

(2) モデル化の意義

研究代表者は、主に現代語における名詞の機能語を研究対象としてきた。しかし、モノダをはじめとする名詞の機能語化は言語の変化の1つであり、現代語における共時的な研究だけでは、言語変化の要因という視点が欠落することとなる。より有用な研究を目指すためには、歴史的研究に裾野を広げる必要があり、共時態から通時態にも適用可能なより汎用的な枠組みを構築することが大きな目的となる。名詞の機能語化について、名詞修飾と述語名詞の意味特性という現代語研究で得た知見を、中世以降の日本語における名詞句の機能語化研究に応用することで、言語の実態記述に留まらない、変化に関わる文法記述モデルの構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、名詞の機能語化を網羅的に調査し、具体的な研究対象を定めていった。

(1) 研究のための基礎作り

効率よく網羅的に調査するためには、調査用のコーパスが必要である。近代語コーパスとしては、主として国立国語研究所が開発した『太陽コーパス』を、現代語コーパスとしては、国立国語研究所が現在開発中の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用する。近代から現代を見渡すものとして、青空文庫もコーパスとして使用する。中世・近世語の検索にあたっては、主に国文学研究資料館の「日本古典文学本文データベース」を利用し、検索しやすい形に二次加工する。

(2) 分析のための視点

用例を採集した後、名詞の意味特性と名詞修飾の関係に着目し、分類・分析を加える。資料性の偏り、過不足を考慮し、足りない点は書籍による調査を行う。

(3) 具体的な研究手法

具体的な研究手法を以下に示す。分析用の資料整備と分析の2点に分けて示すことにする。

《資料》

- ・網羅的な調査のための中世・近世コーパス作成とコーパスを活用したデータの収集・整理
- ・中世・近世の資料を収集し、電子テキスト

化および検索の便宜を図るための情報付与を行う。「日本古典文学本文データベース」の中世・近世の全数と、抄物・洒落本などを採録し、ジャンルに偏りがないよう配慮したコーパスを作成する。規模としては、80万語程度を想定する。

- ・上記、作業終了後、データの精度を確保するため、原文と対照し校正作業を行う。

《分析》

- ・以上の作成したコーパスおよび書籍による調査から、新屋(1989)の名詞分類に従い、中世・近世におけるそれに該当する名詞群と名詞修飾の使用実態を調査・記述をする。時代、ジャンルなどで分類することにより、使用実態を明らかにし、名詞の機能語化と名詞修飾との関係を分析する。
- ・新屋(1989)の文末名詞文となる述語名詞の意味分類に従い、近代語・現代語でも調査を行い、名詞の機能語化を調査する。
- ・中世・近世・近代語・現代語という時代ごとの調査結果の分析をする。

4. 研究成果

研究成果としては、研究の方法で挙げたように《資料整備》と《分析》の2点に大きく分けられる。

(1) 資料整備

時代性、語彙量などを考慮し、分析するために必要となるコーパス、または、使用したコーパスは、以下の通りである。

- ・中世・近世「日本古典文学本文データベース」
- ・近代「太陽コーパス」,「青空文庫」
- ・現代「新潮文庫の100冊」「青空文庫」「現代日本語書き言葉均衡コーパス」

近代・現代のコーパスは、主に国立国語研究所によって作成済みであり、検索ツールも充実しているが、中世・近世の「日本古典文学本文データベース」については、Web上の検索ができるだけで、網羅的な調査には向いていない。

(<http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/home.cgi>)

「日本古典文学本文データベース」の「著作権について」には次のような記載がある。

- (2) テキストのダウンロードは可能です。表示、出力したテキストの電子的あるいは光学的を問わず、その複写は個人の研究の範囲に限られます。それらの他者への貸与、譲渡は原則として出来ません。

- (3) テキストの電子的な2次加工は利用者の個人研究の範囲内で認められますが、その成果物を他者に貸与、譲渡は出来ません。また、いかなる形式でもそれらを原則として公開することは出来ません。

個人の研究の範囲で、ダウンロード可能であり、かつ、2次加工もできることから、近代・現代コーパスでも使用されている国立国語研究所作成の検索ツール「ひまわり」で扱えるように、XML形式に変換した。また、語の検索だけではなく、書誌情報も調べられるように、リンクを形成し検索の便宜を図った。「日本古典文学本文データベース」にある、中世・近世の資料『日本古典文学大系(旧版)』と『新本大系』の合計801作品をコーパス化した。

(2) 分析結果

① 2009年2月28日、麗澤大学の滝浦真人教授が主催した「科研費補助金によるワークショップ モダリティーとポライトネスの語用論」において、「モノダの解釈と語用論の関連性—「当為」を中心に—」という口頭発表を行った。これは、現代語におけるモノダ文だけではなく、近世におけるモノダ文においても、「当為」と呼ばれる用法には語用論的条件をふまえた研究が不可欠であることを主張し、言語変化に対する1つの研究手法を提示することを試みたものである。従来の研究はモノダを助動詞と一括りにし、助動詞モノダが持つ多義的な用法として「当為」を位置づけるものであった。本発表では、モノダが、構文的に、一言語形式として作用する意味はあくまで〈一般的傾向〉であり、その基本義をベースとして、人称や実現可能性といった諸要因により、それぞれの解釈が生じると考えた。こうした観点は、言語形式と意味の関係を問い直すものであり、本研究の主目的である名詞の機能語化に関わる1つの試論と位置づけられる。

② 田島毓堂編、和泉書院、日本語学最前線、2010、「ツモリダの用法と構造変化—文法史研究の一試論—」(pp. 459-474)を執筆した。名詞の機能語化を通時的に研究するために、ツモリダを研究対象として、用法の広がりや変遷を調査、分析した。

先行研究では、ツモリダは文化化した形式と認められる一方、共時的な用法記述に留まり、語誌や変遷については研究対象とされてこなかった。ツモリダの用法には基本的に〈意志〉と〈思い込み〉があるとされるが、中世までにはツモリダのこうした用法は見られず、近世以降増加する。またツモリダが

現れ始める近世初期は〈意志〉の用法に偏り、〈思い込み〉は近世初期から見られたわけではなかった。〈思い込み〉は「(人物)のツモリ」という特定の形式から分化した可能性が高く、〈意志〉からの一派生形式であることを指摘した。

文法化のあり方は意味の観点に注意が集まるが、名詞が機能語化(助動詞化)することに関しては、文法化する語の意味(ツモリのような連用形名詞)と連体修飾構造(外の関係・「AのB」といった構造)が関わり用法変化へとつながると考えられる。こうした観点は言語形式と意味の関係を問い直すものとする。しかし、研究成果が新たな研究の糸口の発見に留まったことも事実であり、ツモリダ以外の形式も視野に入れ継続的に発展させる必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①北村雅則, モノダの解釈と語用論の関連性—「当為」を中心に—, 科研費補助金によるワークショップモダリティーとポライトネスの語用論, 2009, 麗澤大学

[図書] (計1件)

①田島毓堂編, 和泉書院, 日本語学最前線, 2010, 「ツモリダの用法と構造変化—文法史研究の一試論—」(pp. 459-474)を執筆

[その他]

ホームページ等

<http://www.maruron-ac.net/ngu-u/public/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 雅則 (KITAMURA MASANORI)

名古屋学院大学・商学部・講師

研究者番号: 50455424

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: